

阿 修 羅



今年は「阿修羅」が大活躍でした。東京と九州の国立博物館での「阿修羅展」。僕は九州に行きましたが、朝10時で博物館の入り口は長蛇の列。それを見て連れが言ったのです。

「私たち奈良に住んでるのに、何でこんなところで、わざわざ並んで見るわけ？」

ウーン、まあ、それは、奈良の阿修羅も九州の阿修羅も同じといえば同じで、違うといえば違うとも言えるけど、我々には新幹線の時間があるし、とりあえず博物館の常設展だけを見ることにしたんですが、これが当たりでしたね。

吹き抜けの玄関ホールに飾られたドデカイ博多山笠、博物館というよりテーマパークのようなディスプレイ、常設コーナーだけでも企画を凝らした展示と質の高いハイビジョン映像で、飛鳥の万葉記念館に似ていますが、常設だけなら入館料400円は、はっきり言って安い、お買い得です。

この博物館は4年前に国内4番目の国立博物館としてオープンしたんですが、これは最近とみに劣勢に立つ邪馬台国論争の九州勢が、巻き返しを図ろうという魂胆でしょうか。(そういえば先日纏向で卑弥呼の宮殿と思われる大型の館跡が出ましたが、今頃は博物館の入り口に、「奈良県の方は入館お断り」の貼り紙が……ある訳ないでしょう)。場所は太宰府の天満宮の裏山で、驚いたことに山の中に作られたエスカレータのトンネルを抜けると博物館の入り口に出る、不便なところですが、わざわざ行くだけのことは、あります。

これが夏の終わりの出来事で、そして秋、蒼天に白雲たなびき、奈良に阿修羅が帰ってきた。阿修羅は戦いの神。古代インドでは赤色の憤怒の形相をした悪神で、帝釈天に戦いを挑み、倒され、蘇り、また挑み、倒され、蘇る。阿修羅は永遠に戦い続け、永遠に負け続ける、すなわち「修羅場」。「阿修羅のごとく」黒木瞳と八千草薫の映画で描かれた夫と妻の壮絶な戦い、すなわち「修羅場」。この阿修羅が仏教では善神に生まれ変わり、三面六臂の怪異な姿はそのままだが、仏法を守るための戦いの神として描かれるようになる。興福寺の阿修羅はまさにその一つに他ならない。

「お堂で見る阿修羅」。今秋、興福寺の仮金堂で開催された特別展。釈迦三尊像をはじめ、十大弟子、八部衆、四天王の28体の立像群が天平の形そのままに、お堂の中に、古色を帯びた雰囲気の中で並んでいた。

しかし、天平6年(734年)正月十一日、この日落慶法要を迎えた興福寺の西金堂に集まった人々は、足元から忍び寄る極寒の厳しさも忘れて、堂内の荘厳華麗さに、一様に眼を奪われたはずである。



興福寺の西金堂は、聖武天皇の皇后、藤原光明子が、前年に亡くなった実母の橘三千代の一周忌の法要のために一年という短時間で建てたもので、堂内の須弥壇上で金色に輝く本尊の釈迦三尊像はもちろんだが、より人々の眼を引いたのは、全身真っ赤に塗られた阿修羅をはじめとする八部衆の奇怪な姿だったはずである。

象の頭をかたどった帽子をかぶった五部淨（ごぶじょう）、肩から頭に蛇を巻きつかせた沙羯羅（さから）、頭が鳥の迦楼羅（かるら）、獅子の帽子をかぶる乾闥婆（けんたつぱ）、三つの眼に一本の角を生やした緊那羅（きんなら）、頭髪が逆立ち、目を吊り上げる怒りの鳩槃荼（くばんだ）……、彼らは一様にその奇怪な姿とは不似合いな、悲しげで、愛らしげな顔をしており、また生身の人間を思わせる写実的な表現は見る人を驚かせた。

八部衆を作ったのは百済からの渡来人の將軍万福だが、その表現は皇后の信頼が厚く留学層として唐から帰国した道慈が指導したと伝えられている。しかし如何に天才といえども、想像だけではこの優れた彫刻は造り出せない。モデルがいたんじゃないかと思うんです。

「孫じゃないの」

「えっ!、まご - - ?、まごって、あの馬をひっぱってる馬子じゃなくて、孫の手のまご……?」

「そうよ、八部衆は橘三千代が亡くなった時に、その菩提を供養するために建てられた西金堂に収めるために造られたんでしょう。橘三千代って確か文武天皇の乳母で後宮で力を持っていた人よね。美努王という夫がありながら、藤原不比等と再婚してしまう女でしょう。665年（天智4年）の生まれだから亡くなった時は68歳。だったら、ちょうど八部衆の年頃の孫がいたんじゃないの?」

八部衆の年頃って、あなた、人間じゃあるまいし、 - - でも、確かに八部衆のモデルは十代の少年か少女といわれている、もしかしたら彼らは三千代の葬列に従った、彼女の血をひく孫だったのかも知れない、あるいは孫の一人かもしれない、それは十分に考えられる - - 。

橘三千代は、最初の夫の美努王との間には、葛城王（橘諸兄）、佐為王、そして藤原北家に嫁ぐ牟漏女王を産み、再婚した藤原不比等との間に光明子と多比能（たびの）の二人の女子を産んでいる。三千代の一周忌の落慶法要には、彼らはもちろんのことだが、彼らの子供達、すなわち三千代の孫たちも参列していたはずである。多比能の一人息子で、今年10歳になる泉王子、後の橘奈良麻呂もその一人だった。

橘諸兄の息子でもあった奈良麻呂は、諸兄の失脚後に朝堂の覇権を握った藤

原仲麻呂と対決し、「橘奈良麻呂の変」と呼ばれる謀犯劇を企てることになるが、まだこの時は、一人の少年に過ぎなかった。廟堂に列席した彼は、年嵩の何人かの従兄弟たちと出会い、自分の出生の秘密を知ることになる。

一人は藤原光明子の娘、阿部皇女（15歳、後の孝謙女帝）、一人は藤原北家の長男の永手（19歳）、彼は後に獄舎に繋がれた奈良麻呂を糾弾することになる。そして、もう一人は佐為王の娘で後に聖武天皇の夫人となり、深く仏教に帰依して橘婦人と呼ばれることになる古那可智（12歳前後）である。

阿部皇女 久しぶりですね。そなたは、多比能さまと一緒に山城の井出で暮らしていると聞いていましたが、元気そうでなによりです。井出の里は泉川（木津川）に沿った静かなよい土地だと聞きました。あなたの泉王子という名前は泉川からつけられたとか。それにしても聞いていた通り、私とあなたは本当によく似ていますね。あなたの母の多比能さまは、私の母の実の妹、私達が似ていても不思議ではないが、私に似せて作られたというあの阿修羅の穏やかな顔は、本当はあなたなのかも知れないですね。

藤原永手 私と会うのは初めてだな、泉王子。なるほど多比能さまの子だ、涼やかな良い目をしている。もっとも父親の葛城王さまとは似ても似つかぬ。そなたが葛城王さまの御子ではないということは京師（みやこ）では知らぬものはおらぬ。京師の橘の屋敷に出てくると聞いた。私の通っている大学寮へ入るそうだな。これからは我ら藤原一族の時代だ。泉王子、そなたも皇后様の甥、これからは藤原の一員として皇后様のために働くがよいぞ。

古那可智 泉様、あなたは藤原の人間ではありません。このお堂におられる仏様は本当に素晴らしい、でもこれは私たちの仏様ではありません。これは皇后様が藤原一族の繁栄のために造られたもの。御覧なさい、ここに集まっておられる方々を、ほとんどが藤原の方々。確かにあなたのお母様の多比能さまは皇后様の御妹御。でも多比能叔母さまは違います。いつも貧しい人々のことを考えておられます。貧しい人や病気の人を救うために、お寺の中に何か施設のようなものを造ろうとなされているのをご存知でしょう。

泉様、私たち、帝の血筋を受け継ぐものは、長屋王様が亡くなられてからずいぶん悲しい思いをして生きてきました。でも藤原の世は長くは続かない。必ずあの方たちに日が陰る時がやって参ります。その時こそ、泉様の時代がやって参ります。

どうされたのです。そのような悲しい顔をなさって、まるで阿修羅のお顔のような。いいえ、もしかしたら怒っていらっしゃる。そのお顔も阿修羅そのもの。泉様、泉様、いいことを教えてあげましょうか。私たちの間で語られている秘密のうわさ、それは阿部皇女様のお父様とあなたのお父様は同じ方だということ。そう、ここにはいらっしゃらない、只一人の高貴な方だということ。

11月8日 相坂越えから志賀の都へ

フランスの諺、「ゆっくり行く人が、一番遠くまで行く」。

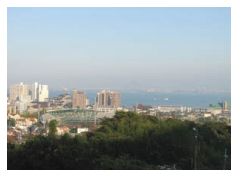
そうですね、僕も自転車が大好きで、よく遠出をしますが、でも奥沢さんには敵わない。たぶん奥沢さんの場合、1日の例会で2日分楽しんでありますね。大津の山を歩いたこの日もそうでしょう。伊丹から大津までの往復といえは1日のサイクリングコースとして、それだけでもう十分です。まあポポアの例会のコースは、奥沢さんにとっておまけみたいなもんでしょうか。

6時に伊丹の家を愛車で出発されたそうです。大阪から京都に向かう場合、自転車の高速道路は淀川河川敷の自転車道、だから、奥沢さんも淀川を目指したそうです。神崎川を渡って、おそらく新大阪あたりから淀川に出る。それから城東貨物線の赤川鉄橋を渡って（この橋は淀川で唯一、人と自転車専用の木の橋です）鳥飼大橋を過ぎて、いくつかのワンドを越えて、枚方パークの大観覧車が大きくなるころには奥沢さんの自転車はもう絶好調で、沢山の鳥たちと一緒に走っているはずで。

男山を巻いて、大山崎の天王山を対岸に望むと、桜の名所の背割堤で、ここは桂川、宇治川、木津川の三川が合流して淀川に変わるところ。ここからは太閤の夢を追って、淀から中書島、伏見から観月橋、六地蔵から醍醐寺の前を通って、奈良街道をまっすぐ登れば相坂越えの追分に出るはずだったんですが、最後の詰めが難所になるのはよくあることで、少し道に迷われてそのために到着が10時になったそうです。

それにしても凄い、ため息が出ますね。ちなみに背割堤から桂川の自転車道に入ると嵐山に、木津川に入ると木津から平城山を越えて奈良へ、郡山、斑鳩、飛鳥川、明日香と自転車道が続いていて、嵐山から明日香まで走れます。

自転車で走り続けるという奥沢さんの主張、賛成です。



三橋節子さんの絵を見ていて気が付いたのですが、絵の題がいいですね。「あめ屋さん」「あたたかい部屋」「風のはなし」「冬の花」「土の子」「どこへゆくのか」「野草」「アネモネ」、なんか昔の童画の題のようです。「なずな」「クサマオとカラスうり」これは子供さんの名前だと冊子にありました。クサマオは草麻生さんです。それから「千団子さん」えっ？、千さん、千家の方？、違うんです。これは三井寺の護法善神堂（ごほうぜんじんどう）の守護神、鬼子母神のお祭りで、千個の団子を供えることから「千団子祭り」と呼ばれているそうで、毎年5月16・17・18日の3日間、祭りの日は植木市や苗市で賑わうそうです。大津の人は「千団子さん」に行ってきたとか、言います。